「安息日に、腰の曲がった女を癒やす」　2023年08月17日

ところが会堂長は、イエスが安息日に病人を癒やされたことに腹を立て、群衆に言った。「働くべき日は六日ある。その間に来て直してもらうがよい。安息日はいけない。」しかし、主は彼に言われた。「偽善者たちよ、あなたがたは誰でも、安息日に牛やろばを飼い葉桶から解いて、水を飲ませに引いて行くではないか。この女はアブラハムの娘なのに、十八年もの間サタンに縛られていたのだ。安息日であっても、その束縛から解いてやるべきではないか。」（ルカ13：14～16）

主イエスは、安息日にいつものように会堂で教えておられた。そこに、18年間も病の霊に取りつかれた女がいた。彼女は腰が曲がったままで、伸ばすことができなかった。主イエスはその女を見て呼び寄せ、「女よ、あなたは病から解放された」と言って、手を置かれた。すると、たちどころに曲がった腰が真っ直ぐになり、感謝して、神を崇めた。福音書には、主イエスは言葉によって、病人を癒やし、悪霊に取りつかれて苦しむ人から悪霊を追放されたという奇跡が記されている。神の子イエスは、病を癒やし、悪霊を追放する権能を神から与えられていたという、福音書著者たちの信仰告白である。

会堂にいた民衆は、主イエスのなさった奇跡を見て、その力に驚いた。ところが、会堂長は、安息日に病人を癒やしたことに怒り、民衆に向かって、「働くべき日は六日ある。その間に来て直してもらうがよい。安息日はいけない」と言った。会堂長は、会堂での礼拝はもとより、会堂を中心にユダヤ人の共同体を形成していたので、地域の諸々を取り仕切る町長、村長のような働きをしていた。会堂長は、礼拝での神の言葉の取り次ぎをファリサイ派の人々に依頼するのを常としていたので、彼らの教えに従っていた。ファリサイ派の人々は、モーセの十戒の第四戒「安息日を覚えて、これを聖別しなさい。六日間は働いて、あなたのすべての仕事をしなさい」という戒めを厳格に守り、安息日には、何の労働もしてならないと教えていた。会堂長は、主イエスが安息日の労働禁止の教えに反し、病人を癒やす労働をしたと咎めた訳である。彼は、直接主イエスに言わず、民衆に言っているところに、律法厳守を力説しながら、主イエスの業に戸惑いを感じていることが分かる。会堂長の言葉に対し、主イエスは、「偽善者たちよ、あなたがたは誰でも、安息日に牛やろばを飼い葉桶から解いて、水を飲ませに引いて行くではないか。この女はアブラハムの娘なのに、十八年もの間サタンに縛られていたのだ。安息日であっても、その束縛から解いてやるべきではないか」と答えられた。会堂長を「偽善者たちよ」という厳しい言葉で叱責された。主イエスは、ファリサイ派の人々や律法学者たちに対しても、同じ「偽善者たちよ」と言って、批判している。牛やろばは、安息日であっても、水を飲ませるために飼い葉桶から解いて、引いて行くではないか。生き物を養うためには、安息日の決まりは守れない。まして、この女はアブラハムの娘として神から愛されている。18年もの間、サタンに苦しめられていたのだから、安息日であっても、解放されて当然ではないか。主イエスの言葉を聞いて、安息日の戒めを破ったと考えていた人たちも、恥じ入った。民衆は、主イエスによって、腰の曲がった女を癒やされたことを、共に喜びあった。

今日の我々から見ると、愚かな議論と思えるが、当時は、生死をかける問題であった。そして、この問題は今日でもある。<u>規則を守ることに力点を置き、その背後で、人間を苦悩と死に追いやっている現実</u>がある。<u>法は、人間を生かすもの</u>であることを覚えたい。